

自然遊び場をつくる —香里ヌヴェール学院小学校「木立の丘」—

若 生 謙 二

1. はじめに

2024年4月22日に大阪府寝屋川市の香里ヌヴェール学院小学校に自然遊び場「木立の丘」が誕生した。同校は、1923年に設立された聖母女学院の経営する小学校として設立され、学院は昨年2023年に100周年を迎えた。2022年11月に筆者は、西日本私立小学校連合会生活総合部会の依頼で動物園と自然遊び場についての講演を行った。講演後、同小学校の嶽篤史教頭から、本学でもこのような自然をとりいれた遊び場をつくりたいと考えているので、協力していただきたいとの依頼をうけた。小学校では100周年の記念事業として校庭に自然遊び場を設けることを決めた。

嶽教頭からの依頼にもとづき、筆者がその設計と施工管理に携わったので、自然遊び場「木立の丘」の考え方や構成などについて報告する。施工は、造園施工会社、庭まつかわであり、「木立の丘」は同社の松川純也代表との議論を通じて実現していった。

2. 自然遊び場の考え方

かつて公園の遊び場の定番であったブランコ、シーソー、回旋塔等の遊動遊具での事故が多発したことにより、2002年に国土交通省から「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」がだされ、公園での安全確保と維持管理計画が進められてきた^{註1)}。こうした取り組みにより、安全への意識が進む一方で、整備された平坦地に大型の複合遊具を配するという、画一化された公園の遊び場が急速に広まるようになった。

安全基準は満たすようになったが、こうした複合遊具にはいくつかの課題がある。一つ目は多くの遊具に用いられている鉄とプラスチックは、熱伝導率が高く夏季には高温になり、冬季には低温化することである。実際に夏の暑さから子どもたちが利用を手控えるという動きもみられている。脱プラスチック社会を目指すという動きからも遊び場にこれらの素材を用いることの再検討が求められるであろう。

二つ目は、感性の育成期である子どもたちを彩度の高い原色を施した複合遊具の環境に委ねてよいのかという疑問である。色彩感覚は幼少期から育成される。このような色彩環境に委ねることは、将来、生活の場の色彩環境への反応に無知覚な感覚を育成することにつながりかねない。

三つ目は最大の課題であり、こうした複合遊具では類型化したパターンの遊具を配することで、人工的で画一化する傾向がみられていることである。

身近な公園の遊び場の画一化は、我が国の子ども達の想像性を育む心を妨げかねない。熱伝導率の高い鉄やプラスチック製の遊具や彩度の高い原色の遊具を使うことなく、子どもたちの好きな起伏や変化のある土地の形状を創出し、随所に高木や地被類などの植物を配することで、開花や落葉などの自然の変化に目を向けることができ、遊び場と向き合ってそれぞれの方法で遊ぶことができる。子どもたちは自らが関わることで、何らかの変化が生まれ、発見が得られることを望んでいる。

子ども達が起伏や変化のある土地で土や植物にふれ、駆け回ることによって豊かな心と身体を育む場を設けることが求められる。上記の課題を解消するような遊び場を筆者は自然遊び場と呼んでいる。

このような自然遊び場については、欧米の動物園で野生動物の暮らす自然環境での体験を感じるような遊び場が展開されており、また幼稚園でも森の幼稚園などの自然に向き合って遊ぶ取り組みが進められている。わが国でも神奈川県の川和保育園などで独創的な遊び場がみられ、筆者も河南町立中村子ども園、紀の川市「野あそびの丘」等で自然遊び場の創出にとりくんできた¹⁾。

3. 香里ヌヴェール学院小学校「木立の丘」

香里ヌヴェール学院小学校の自然遊び場では、1年生と2年生などの低学年用と4年生、5年生、6年生の高学年用の二か所をつくることになった。

1) 低学年の自然遊び場

2023年の1月から計画案を進め、2023年の夏に、高学年用に先駆けて低学年用の校舎南前の校庭に1年生と2年生などの低学年のための自然遊び場を造った。この校庭には南側に開校直後に植えられたともいわれている2本のイチヨウの巨木があり、秋には黄色く色づいたイチヨウの葉が茂り、児童たちはイチヨウの落ち葉がつもった場を走り回る（図1）。東側にはケヤキとサクラが茂り、秋にはその葉が校庭につもり、その横には鉄製のジャングルジムが配されている。中央には木製遊具があり、校庭全体には砂が敷き詰められ、児童たちは休み時間になるとこの砂場を駆け回る。

ここには低学年用であるため、高さ1.2m長さ7.6mの丘をつくり、そこから北側の校舎側に向けて滑り降りる人工芝の滑り台、北側の斜面は急な勾配とし、周囲を岩で固めて土留めとしている（図2、3）。南側の斜面の岩の上からは3本のロープが下がり、それにつかまって岩を登ることもできる（図4）。丘の上には南部分の左右の両側に岩組の階段を配して登るようにしている。丘の南部分には盛り土の丘の中にヒューム管を配して、その中をくぐって遊ぶこ

とができるようにした。ヒューム管から抜け出てきた児童と、丘の上から飛び降りた児童が衝突するという事例が他校で見られたため、丘の上から飛び降りることがないように、丘の上部のヒューム管が配された両端に岩と低木を配して、飛び降りを防ぐ空間構成とした（図5）。

この遊び場は自然遊び場である。そのため、上記のような空間の変化にあわせて植物を配することにした。丘の斜面部分はノシバで被覆したが、芝は活着するまで養生が必要であるため、児童たちには芝を守るために翌春までその上を歩かないように学校からの指導がなされた。丘の上の両端には、児童が飛び降りることがないように、ハイバクシン、ユキヤナギ、シモツケなどの低木と共にツツブキ、サルビアなどを配し、岩の階段や岩場の際には、ユキノシタ、コクリュウ、ヤブランなどを配した。岩と土で構成された起伏に、植栽を施すと見違えるほど、自然の生命感が醸し出される。自然遊び場に植栽は不可欠である。



図1 低学年の自然遊び場の敷地



図2 岩積みと傾斜地でできた盛り土の丘



図3 芝の丘に配された人工芝の滑り台



図4 南側の岩登りの丘



図5 丘の下にはヒューム管を配し、縁の岩で飛び降りを防ぐ



図6 北側に配した野の花のエリア

この自然遊び場では、丘に植物を配するとともに、北側の老朽化したジャングルジムを撤去した跡には、低木と地被植栽による野の花のエリアを設けた。植栽種はシモツケ、ツワブキ、ステイパ、ヒューケラ、ヤマブキ、ユキヤナギ、キキョウなどである（図6）。花の楽しみと共に、昆虫が受粉のために訪れると、児童たちはそれを探すことを楽しみにすることであろう。

2) 高学年の自然遊び場 「木立の丘」

同校には、敷地南側の高学年の校舎の南に木立の広場とよぶエリアがあり、児童たちは休み時間にはこの木立の中を駆け回って遊んでいる。小学校の方針としては、この木立の中に鉄とプラスチックの複合遊具ではなく、木立にとけこんだ自然な遊び場をつくりたいとのことである。これは私の提唱する自然遊び場の考え方に合致するものである。

小学校4年生以上が使える高学年用の自然遊び場は、低学年用の遊び場を発展させることにした。子どもたちは、高いところに登るのが好きである。木立に囲まれた高学年用の自然遊び場では、丘の配置を5.4mと6.5mの丘をつなぐ「く」の字型にし、中央には山に分け入るような感覚になるように、高さ1.5m以上のいくつかの大きな岩を組んでつくった階段を配した。丘の高さを低学年用の1.2mから1.4mにあげ、南側の丘からは35°の勾配で人工芝の傾斜を滑り降りることができるようにしている（図7-9）。こちらの丘にはいくつかの大きな岩を配して、児童たちの好きな鬼ごっこで隠れる場をつくっている。

もう一つの北側の丘は駆けることができるように、広いスペースをとり、端には直径1.5m



図7 3階から眺めた「木立の丘」



図8 南側には人工芝の広い滑り台を配している



図9 丘の中央は巨石の階段となっている



図10 枕木でつくられた落ち葉の籠り場

深さ約 65cm の穴をつくり、落葉期に落ち葉を集めて籠ることができる場とした（図 10）。

これは子供たちが秋になると落ち葉を貯めて、布団のようにしてその中に入って遊んでいたことから、秋の遊び場として設けることにしたものである。この遊び場は枕木^{註2)}でつくり上げた。穴の内側に枕木を円形に打ち付けて固定し、上部は乱杭状に不整形にして変化をつけている。

その北側には枕木で組んだテラスを配した（図 11、12）。この枕木のテラスは、児童たちのベンチとしてもたまり場としても使うことができる。これらの丘には野遊びの雰囲気醸し出すよう随所に低木や地被類を配した。

植栽した低木と地被類は次の通りである。低木：シモツケ、ヤマブキ、奥多摩コアジサイ、ハイバクシングラウカ、地被類：ヒューケラ キヤラメル、ヒューケラ シャンハイ、ヒューケラ ライムリッキー、ヒューケラ フォーエバーレッド、ユキノシタ、オシダ、コクリユウ、ベニセタム ハメルン、サルココッカ パープルステム、ステイパ エンジェルヘアー、ヒメシャガ等である。丘は人工芝を配した滑り降りる箇所と石段の前、枕木テラスの前を除いて、野芝で被覆した。これは踏圧からシバを防ぐ自然遊び場として必要な地被対策である。

これらの丘の奥には、遊びの幅が立体的に広がるように、木登りと木の枝渡りができるエリアを設けた（図 13）。奈良県吉野郡に徳田銘木(株)という山林の銘木に特化した銘木会社がある。そこでは、奈良県の山で伐採した杉などの針葉樹を 50cm 程の枝をつけたまま、高圧洗浄機で樹皮をはぎ、乾燥させて保存して販売している。枝付きの針葉樹の乾燥木は子どもの遊び場にとって格好の木登りの対象となる。私たちは、同社で形状がふさわしい 3 本の乾燥木



図 11 丘の北側の枕木のテラス



図 12 石の階段とテラス



図 13 木の枝渡りの全景



図 14 木の枝渡りの近景



図 15 西側から見た遊び場。
奥に木の枝渡りがみられる。



図 16 丘を滑る子どもたち



図 17 木立の丘で遊ぶ児童たち



図 18 乾燥木に登る児童 産経新聞²⁾より

を選定し、木立の丘に配することとした。乾燥木は大阪市内の越井銘木(株)でさらに加圧注入を行い、防腐処理を行っている。

2.5m の高さの枝付きの 3 本の乾燥木は、敷地の東側、シイやタブなどの常緑樹林の手前に配された。南端のマツの幹にロープを結わえ、そこから 2.5m の距離をとって乾燥木を配し、さらにそこから 2.5m の距離でつづけて 2 本の乾燥木を配し、ロープでそれぞれをつないだ (図 14)。

上下に配したロープの高さは、下から 30cm と児童たちが手でつかむことのできる 1m の高さである。このように配すると西側の正面から入ると、丘の奥に森が見え、その手前に枝のついた乾燥木が並ぶことになる (図 15) ので、森の中の木を枝渡りするという感覚になる。乾燥木は基礎からの着脱が可能であるため、腐朽した後も交換が可能である。

私たちはこの自然遊び場を「木立の丘」となづけた。

高学年用の「木立の丘」は、2024 年の 3 月初旬から末にかけて施工され、4 月の入学式までに工事は完了した。新学期が始まり、筆者は児童たちが利用する姿を眺めた^(註3)。10:25 からの午前の休み時間が始まると、児童たちは走りながら、西側の園路から木立の丘にやってきた。何周か丘の周りをかけると、ある児童たちは上に登り人工芝の滑り台を滑り降りた (図 16)。他の園児たちはさらに丘の上やその周囲をかけている (図 17)。枕木で構成された落ち葉の遊び場の穴の中を覗くと、一人の女子児童が中で横になっていた。心地よいのであろう。リーダー格の児童が帽子取りをはじめ、取った帽子はこの大きな石の上に置くこうと伝える。子供たちは各々の遊び方を始めているようである。

奥の枝渡りのエリアが賑わっているので目をやると、児童たちは下段のロープの上に足をかけ、上段のロープに手をかけてロープを揺らしている。そして3本の枝付きの木の上には2.5mの頂上に男子児童が腰をかけてこちらを眺めている（図18）。枝渡りではなく、木に渡したロープを揺らして遊び、木の上に登って遊んでいるのである。想定外の遊び方ではあったが、児童たちは存分に楽しみながら遊んでいる。嶽先生によると、木の頂にまで登って腰かける児童は運動能力が高く、児童たちはどこまで登るか、自身で判断して利用しているとのことである。後日、見学を訪れると、上の方から子どもの声が聞こえたので、上を見ると女子児童がクスノキの木の枝に登っていた。枝渡りの木に登ってから、木登りの楽しさに開眼したとのことである。また、別の女子児童は、蔦で輪を作って見せてくれた。クリスマスリースをつくったとのことであった。子どもたちはそれぞれの遊び方を編み出していた。

4. おわりに

自然遊び場「木立の丘」は、香里ヌヴェール学院小学校南庭の木立に包まれた敷地に設けられた遊び場である。周囲を樹林に囲まれていることは、自然を体感する上で大きな役割を果たしている。

「木立の丘」は森の中に配された起伏のある丘である。丘は1.4mの高さがあるため、児童らにとっては、自身の身長ほどもある大きな丘である。このような丘を見ると、子どもたちはまず登りたくなる。登り方はさまざまである。巨石の階段から登ると、大きく様々な岩の表情が記憶に刻まれるであろう。岩に登った位置からは、それまでとは異なる風景が広がるため、視覚的楽しみが得られる。ここからは、人工芝の斜面を滑り降りるのも、丘を駆け回るのも自由である。

この遊び場に設けられた枝渡りの木々は、独創的な遊びの場である。児童たちはこの仕掛けに対して、枝を登り、ロープを揺らすという独自の遊びを考案した。ロープの上は鈴なりになるため、嶽先生は2.5mの幅のロープの上に乗るのは2人までという制限を設けた。

直線を極力用いないことも自然遊び場の特徴である。籠り場の枕木の配置も上部を乱杭状にして不整形にしている。不整形は枕木のテラスでもなされている。枝渡りの3本の木も、直線に並べるのではなく、それぞれに角度をつけて配置している。自然界に直線は見られないからである。

落ち葉の籠り場を設けたのは、低学年用の遊び場が完成した後の秋に確認のために訪問した際に、たくさんの落ち葉をためた場所に数人の児童たちがその中に入り、落ち葉を布団のようにかぶせて楽しんでいた風景をみたことにある。また、嶽先生が子どもたちがつくった宝箱があるんですと言われたので、中を見ると、石やドングリ、紅葉した葉などが入っていた。宝箱は、高学年用の「木立の丘」の隅の樹林の中にひそかに配されていた。いずれ新たな宝箱が出来上がるのであろう。

空間的な設えだけではなく、自然遊び場の意義はそうした空間を利用したことで得られる感覚的な対応にある。自然遊び場は心に訴えかけるものでもある。落ち葉の籠り場に籠る子どもは何を夢想するであろうか。宝箱をつくり、木陰に配した子どもは何を託したのであるうか。また、木の頂に登って眺めた景に何を思うのであろうか。心への訴えは、想像性を育む。

これらは製品化した定型的な遊具では得られない感覚である。定型的な遊具での遊びは、滑る、跳ぶ、登るなどの行動要素は取り入れられているものの、それらの行動は単体で消費的に利用されるように配置されている。自然遊び場「木立の丘」は、空間を連続して総合的に利用するように配されており、その利用の順序は自由である。各々が思うままに駆け回って利用するうちに、それぞれが思う遊び方を創り出していくことになる。すでに新たな鬼ごっこの遊び方や創造的な木登り遊びが始められている。

「木立の丘」は子どもたちが入り込んだ時から、駆け出して遊びに行こうとすることを意図しており、視覚的に遊びに誘引する遊び場である。その誘いに乗って遊び場に来ると、夢中で遊びにふける。本校の取り組みは、2024年6月13日の産経新聞大阪版に、矢田幸己記者の取材により「野山のような校庭 のびのび」と題して3段抜き写真3枚入りの記事として紹介された²⁾。遊びへの挑発が子供たちの想像性を育む場となり、多様な自然遊び場の潮流が生み出されることを願っている。

文献及び注

註1) この指針は2008年、2014年の2回にわたって改訂されており、遊びは子どもの身体的、精神的、社会的な成長にとって不可欠なものと位置付けている。その一方で、子どもは予期しない遊びをしたり、遊具を本来の目的とは異なったあそびに用いたりすることがあるとして、事故事例に対する遊具に対しての安全確保に関する基本的な考え方を示している。

註2) この枕木は、日本の鉄道に用いられた枕木ではなく、オーストラリア産の製品でタールがしみ出ることはなく、無臭である。

註3) 同園の「木立の丘」は公園とは異なり、小学校の校内にあるので、見学する際には学校の承諾を得る必要がある。筆者は児童らが利用する時間帯である10:25-45の間に見学した。

1) 若生謙二 (2022):自然遊び場をつくる ―河南町立中村こども園園庭、紀の川市「野あそびの丘」―、大阪芸術大学教員養成研究論集 紀要「芸術と教育」6号

2) 産経新聞大阪版、2024年6月13日